

P2-035

学童の手洗いの実態と手洗い演習を取り入れた教育の評価

杉村 篤士、小笹 亜矢子、廣瀬 幸美、
佐藤 朝美、寺内 千絵、殿岡 美絵子

横浜市立大学医学部 看護学科

【目的】

手洗いは感染予防として重要であるため、学童の手洗いの実態を明らかにするとともに、手洗い演習を取り入れた教育を行い、教育方法についての評価を行った。

【方法】

小学4～6年生25名を対象に実施した。手洗い教育を始める前に、手洗いの受講歴と手を洗うタイミング、洗い残しやすい部位を選択式の質問紙にて調査した。手洗い教育の流れは、1.手洗いの必要性を講義し、2.手洗い評価キット(Glitter BugTM)を用い、洗い残しを自身で評価してもらい、3.洗い残しやすい部位について講義し、4.衛生学的手洗いの動画を視聴後に、手洗いを実施してもらった。終了後には、教育方法の評価として、洗い残しやすい部位と手洗い教育での学びを選択式の質問紙にて調査し、洗い残しやすい部位については、教育前後での変化を χ^2 検定にて分析した。質問紙調査前に、子どもと保護者に、調査の趣旨、自由参加の保証、匿名性の保護等を説明したうえで調査を開始した。

【結果】

質問紙は、24名(回収率96%)の回答があり、欠損のない23名(有効回答率95%)を分析対象とした。手洗いについて以前講義を受けたことのある者は17名(74%)いた。必ず手を洗うタイミングは、「手が汚れる授業のあと：22名(96%)」と「外で遊んだあと：18名(78%)」が多かったが、「おやつの前：6名(26%)」と「学校に着いた時：3名(13%)」は少なかった。洗い残しやすい部位では、教育前に比べ教育後に有意に回答が多かったのは親指であった($p < 0.01$)。学びについては、手洗いの大切さ・方法・難しさについて8割以上の学童がよくわかったと回答した。

【考察】

学童期の子ども達は、手が汚れた後や汚い場所での活動後に手を洗うことはできているが、食事前など予防的に手を清潔にすることが習慣化されていないことが明らかとなった。手洗い教育では、講義だけでなく演習を取り入れ、学童自身が体験し自覚できるプログラムを行った結果、洗い残しやすい部位や手洗いの重要性を学ぶことができ、学童の手洗いへの意識を高める一助になることが示唆された。しかし、手洗いの習慣を身に付けるのは難しいことであるため、今後も手洗いの習慣化に向けた取り組みや調査を実施し支援について検討していく必要がある。

P2-036

中学生を対象としたDASS日本語版の信頼性と妥当性の検証

谷田 恵子¹、武内 紗千¹、池田 雅則¹、
片田 範子²

¹兵庫県立大学 看護学部、

²兵庫県立大学

【背景・目的】

我々は他国の研究者とともにアジアと東南アジア地域に住む思春期の子どもを対象として、既存の複数の尺度で構成された質問紙を用いた調査を行うこととなり、そのパイロット調査ではDepression Anxiety Stress Scalesを使用した。その尺度の日本語訳版は尺度を開発した研究者グループによってウェブ上に提供されているが、その信頼性と妥当性は検証されていない。そこで、この尺度を中学生に適応した場合の内的整合性と構成概念妥当性について検討したので報告する。

【方法】

A県にある中学校2校の中学生を対象として、無記名式の質問紙調査を2014年10月～2015年1月に実施した。実施にあたり研究実施者が所属する大学の研究倫理委員会から許可を得た。信頼性はCronbachの α 係数により検討し、妥当性については因子分析と構造方程式モデリングを用いて検証的因子分析を行い、パイロット調査で用いた21問が英語版と同様に7項目ずつの3因子構造となっているかを検証した。

【結果】

中学生329名から回答を回収し、うち291名分のデータ(有効回答率88%)を用いて分析した。Cronbachの α 係数は全21項目では0.899、depressionとstressの因子はそれぞれ0.8以上、anxietyの因子は0.7以下であった。質問項目「何かが起きたときに必要以上に反応しやすかった」、あるいは質問項目「不安なことがなくなり、とても安心した」を除外すると α 係数は上昇した。斜交回転による因子分析では4因子解となり、因子数を3因子に固定して解析した場合、本来のanxiety因子に分類されるべき項目が別の因子に分類された。また共分散構造分析では3因子構造モデルのGFI、AGFI、NFI、CFI、RMSEAの値は高い適合度を示さなかった。

【考察】

42問版のはじめの21問を用いて評価する場合、英語版で示されているような3因子構造への適合度は高くないが、上記の2つの質問項目を除いて分析することで、英語版DASS-21と同等の解釈ができるようになることが示唆された。

【結論】

Depression Anxiety Stress Scalesの日本語版を中学生に用いる場合には、ウェブ上に掲載されている質問項目を修正して使用する必要があることが明らかとなった。